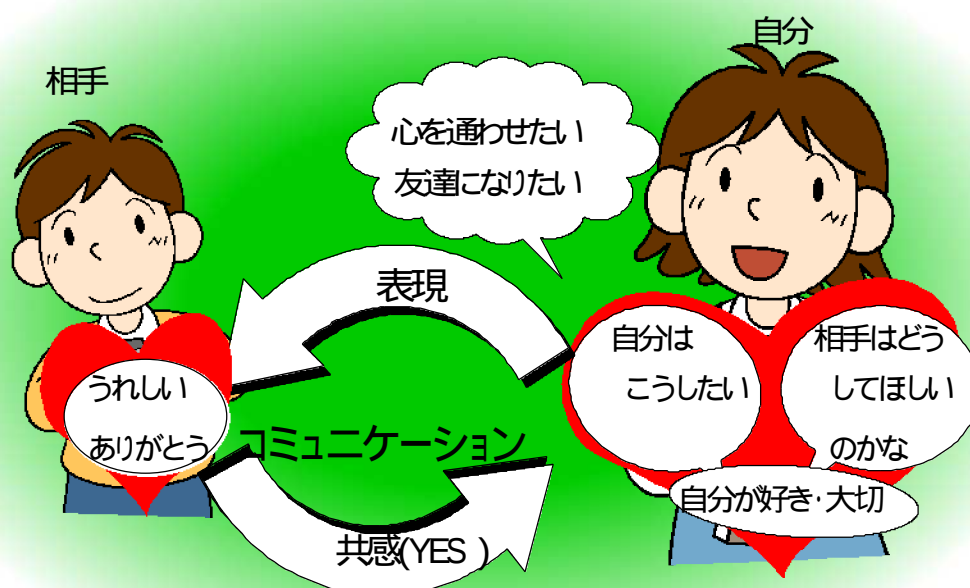


# 道徳プログラム ほかほかあったか やさしい心



ほかほかあったかやさしい心を伝え合おう

## 道徳プログラムで伝え合う力を育てよう！

～「映像資料＋プチ体験」で道徳授業を変える～

教師として、子供たちに将来にわたって幸せな生活を送ってほしいという強い願いがあります。

人として幸せな生活を送るのには、気持ちのよい人間関係が結ぶることが必要不可欠だと考えています。生きる意欲、豊かな心を与えてくれるのは、温かい人間関係であり、特に他人からの「思いやり」の力が大きいでしょう。逆に、人の心がなえる原因となるのもほとんどは人間関係によるものと感じています。

現代の子供たちには思いやりの心がないとも言われています。しかし、本当にそうでしょうか？……………私は、「思いやりの心がないというより、むしろ、思いやりの心の伝え方がわかっていない、またはうまく表現できない」のだと感じています。

「子供たちに、人として幸せな生活を送っていけるように支援したい。そのために、子供たちの心に残る道徳の時間を作り、温かい人間関係に欠かせない思いやりの心を大きく育て、それを伝え合えるようにしたい。」この研究は、そういう思い・願いから始まっています。

平成17年3月

長期研修員 恩田弘子

## も く じ

### PART 1

#### 道徳の時間の基本的な考え方

1. 道徳の時間は学級作りの中核…………… P 1
2. 道徳の資料の開発…………… P 2
3. 道徳の資料提示の工夫…………… P 3
4. 道徳と体験活動…………… P 4
5. 伝え合う力を育てるプログラム…………… P 5
6. 評価について…………… P 6

### PART 2

#### 道徳プログラム展開例( 展開案のボタンをクリック！)

明日から使える展開例！おすすめポイント・概要… P 1

0. 道徳オリエンテーション…………… P 2
1. プログラムオリエンテーション…………… P 4
- 1-2 ホカホカコミュニケーション…………… P 5
2. 「水のつぶやき」…………… P 6
3. 「心のことば」…………… P 8
4. 「文字を書くよろこび」…………… P 10
- column「星野富弘さんのこと」「心のノートのこと」…………… P 13
5. 「この腕が動いたら」…………… P 14
6. 「花さき山」…………… P 16

## 1. 道徳の時間は学級作りの中核

「道徳の時間」に寄せる教師の思いー子供とともに成長する教師としてー

道徳の時間は学校生活の中で、学級活動の時間とともに学級作りの中核をなす時間である。

学級作りにおける道徳の時間の重要性

学級は学校生活の基本となる単位である。その中で人間関係の在り方を学び、その力をつけていくことは、社会に出てから望ましい人間関係を営むためにも非常に大切なことである。また、各教科の授業において、少人数指導等で学級を解体して行われる時間が多くなっていることをかんがみてなおさら、学級の仲間とともに行う道徳の時間は、学級作りの点からもますます重要になってきている。

教師からの「感化」

心に響く道徳の時間を作り出すためには、学校内・学級内に道徳的風土を確立することが基本である。そして、その風土を作るのは教師である。教師からの「感化」が最も大きく子供たちの道徳性を左右するのである。道徳の時間をどうするか、どうしたら子供の心に響き、子供の心を耕すことができるかを考え、授業を構想していくことにより、教師の力も育つ。また、構想した道徳の時間を通して、子供たちの多様な考えに触れることにより、子供相互だけでなく教師の心も耕される。そして、教師の人間性が育つ。豊かな人間性を持つ教師からの感化により、学級の子供たちの人間性も豊かになっていく。つまり、教師自身が道徳の教材となる。道徳の時間を通して、教師と子供が共に学び合い高め合っていけるのである。

一人一人の子供の心に寄り添う

「心の教育」としての道徳教育を考えたときに、教師は一人一人の子供の心に寄り添おうとすることが大切である。心に響く手法も一人一人の子供によって異なるであろう。一つの手法に固執すれば、同じ子供、あるいは心の中の同じ部分の耕ししか行われなかもしれない。様々な手法を取り入れてプログラムを組み、様々な方向からアプローチをすることにより、より多くの子供の心の耕しが行われると期待できる。

様々な方向からのアプローチ

さらに、一人の子供の心の中のことを考えたときに、様々な方向からアプローチすれば、そのたびに道徳的価値が補充・深化・統合されていき、より深い心の耕しが行われると期待できる。

これからの道徳授業の展開

これからの道徳授業は、従来の「型」にはまった授業や工夫のない授業から脱却し、子供の思いや実態に沿い、なおかつ教師の熱い願いに沿った授業を展開していくことが大切である。そのために、教師は、学習指導要領解説道徳編の内容や、道徳教育の基礎・基本を踏まえた上で、新しい発想を持って「道徳授業をデザインしていく」という姿勢を持つことが肝要である。

「教科の授業がうまい教師が、必ずしも道徳の授業がうまいとは限らないが、

道徳の授業がうまい教師は、必ず教科の授業もうまいはずである。」

————— 文部科学省初等中等教育局教育課程課 教科調査官 柴原弘志先生の言葉

## 2. 道徳の資料の開発

道徳の授業が心に響くものになるか否かは、資料の選択にかかっている。指導者は子供の心に響く資料を、常に心がけて探していくことが大切である。

道徳の資料の具備すべき要件は、小学校学習指導要領解説道徳編(P.78)の中に10項目示されている。この要件に加え、

場面設定が明確でわかりやすい資料      長すぎず、説明的でない資料

という要件も重要である。道徳の資料は場面の簡潔さやつかみやすさが大きなポイントとなっている。

### 1. 道徳資料集から

道徳資料集の中にも、子供の心に響く資料があり、教師がそれを見極めて活用するなら大変良いことである。しかし、内容を吟味せず、やみくもに順序通りにその資料集を扱っていくということは避けたい。子供の実態を踏まえ、上記の要件や教師の意図を満たす資料を扱っていく。

### 2. 魅力ある資料の素材の収集

書籍から→小説・絵本・詩・雑誌・漫画・写真集  
情報メディアから→新聞の記事・広告・インターネット  
テレビやラジオの番組から→ニュース・ドラマ・ドキュメント  
コマーシャル  
芸術作品から→映画・絵画・歌  
等

テレビ・ラジオ・新聞等の情報メディアに触れる際に、また、書店や図書館に行った時などに、常に「道徳授業の素材になるものはないか」というスタンスでいると、たくさん素材を集めることができる。



### 3. 必要に応じ、既存の資料を改作・自作する

道徳資料集や様々な方法で収集した素材を、そのまま提示したのでは、子供の実態に適さない場合がある。実態や意図に合うように、必要に応じ既存の資料を改作して使うなどの工夫が必要である。

高学年用と思われる素材でも、文章を短くしたり、言葉を平易にしたりなどの改作で低・中学年でも使える。逆に低学年用と思われる素材でも、発問の工夫により高学年でも使える場合がある。例えば、絵本の中には、高学年や中学生でも使える物がたくさんある。

### 4. 国語科との違い

同じ話を用いたとしても、国語の授業と道徳の授業とでは、文章表現を変える必要がある。下の表の違いを踏まえ、道徳の時間は、**資料の国語的読み取りの授業にならないようにする。**

| 国語の授業             | 道徳の時間                                |
|-------------------|--------------------------------------|
| 描写の豊かな文学的な文章を用いる。 | 子供が自分の感じ方や考え方を発掘しやすく、場面設定の明確な文章を用いる。 |
| 教材文の読解や理解が中心      | 資料に自分を投影して、自分理解することが中心               |
| 教材の中で学習の課題が作られる   | 子供の生活問題から主題が生じる                      |
| 文の叙述に根拠を求めて話し合う   | 各自の考えの根拠を生活経験に重ねて話し合う                |
| 答えは文章の中にある        | 答えは自分自身の中にある                         |

### 3. 道徳の資料提示と活用の工夫

資料の文章が書いてある紙を配布して、「読みましょう。考えましょう。」という方法は避けたい。なぜかというと、こういう提示の仕方をする、子供たちは「心で感じて考える」ということをせず、「読解して読み取る」としてしまふのである。これが、国語的な授業になってしまう要因となっているのである。

心に響かせる最も効果的な方法は、映像による資料提示である。

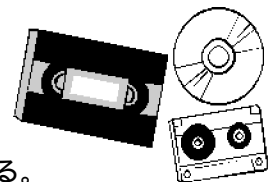
せっかく良い資料を選定しても、提示や活用の仕方が良くなければ、子供の心に響かせることはできない。子供の心に響くように提示や活用の仕方にも様々な工夫をしてみると良い。

#### 1. 資料を切って提示(分割提示)

子供たちが主人公の考えや気持ちを真剣に考えられるように、また、多様な考えを引き出せるように、資料を場面ごとに区切って提示したり、話の結末を伏せて提示したりする工夫をする。

#### 2. 視聴覚と心に訴える資料提示

- 資料の写真・挿絵をプロジェクターを使いスクリーンに大きく写し、映像として提示する。
- パソコンで、資料の流れをプレゼンテーション形式に作り提示する。
- BGMや歌を用いる。
- 資料に出てくる物の実物を用意して見せる。
- 紙芝居・場面絵・ペープサートなど用いる。
- 内容に合った声（子供の声、おばあさんの声等）で録音したテープを聴かせる。
- 黒板を劇場化する。（再現構成法）



#### 3. 文章の一部分や絵・写真の一部分を隠して提示

「ここに何が入ると思うか？」という問いかけから、多様な考えを引き出すことができる。

#### 4. 資料を生かす目安

| 資料活用類型 | 活用の仕方と目安                                        | 望ましい発問例                                                                                    |
|--------|-------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------|
| 範例的活用  | 主人公の行為や考えを手本や範例とさせる<br>・原因や理由を問う<br>・学んだことを問う   | ・○○はどんな考えからそうしたのか<br>・○○が～したのはどんな気持ちからか。<br>・なぜこのようなことになってしまったのか。<br>・○○からどんなことを学んだか。      |
| 批判的活用  | 主人公の行為や考えを批判・検討させる<br>・見解や考えを問う<br>・考えのわけを問う    | ・～したことをどう思うか。なぜそう思うか。<br>・二つの考えのうちで自分はどちらの考えか。<br>・○○はどうすればよかったのか。<br>・○○はこれからどうすればいいと思うか。 |
| 共感的活用  | 主人公の立場に立って考えさせる<br>・気持ちを問う<br>・考えを想像させる         | ・○○はどんな気持ちか。<br>・～している○○の心の中はどんなか。<br>・○○はどんなことを考えながら～しているのか。                              |
| 感動的活用  | 感動を大事にした価値把握をすすめさせる<br>・感動したことを問う<br>・感動したわけを問う | ・一番心を動かされたのはどこか。<br>・なぜそこが特に心に残るのか。<br>・みんなの様々な感じ方を聞いて、どう思うか。                              |

このような活用類型を念頭に置くことで、指導に見通しと多様さをもつことができる。同じ資料に対しても、活用類型によって、発問の仕方が変わってくる。多様な方法を試みたい。

## 4. 道徳と体験活動

実際に体験することほど子供の心に響くことはない。道徳の時間での学びをより確実なものにするために、体験活動を生かすとよい。なかでも、道徳の時間の中でちょっとした体験(プチ体験)を組み入れると効果的である。それは、学級全員で 同時に 共通体験 ができるからである。

### 1. 日常の体験を生かす

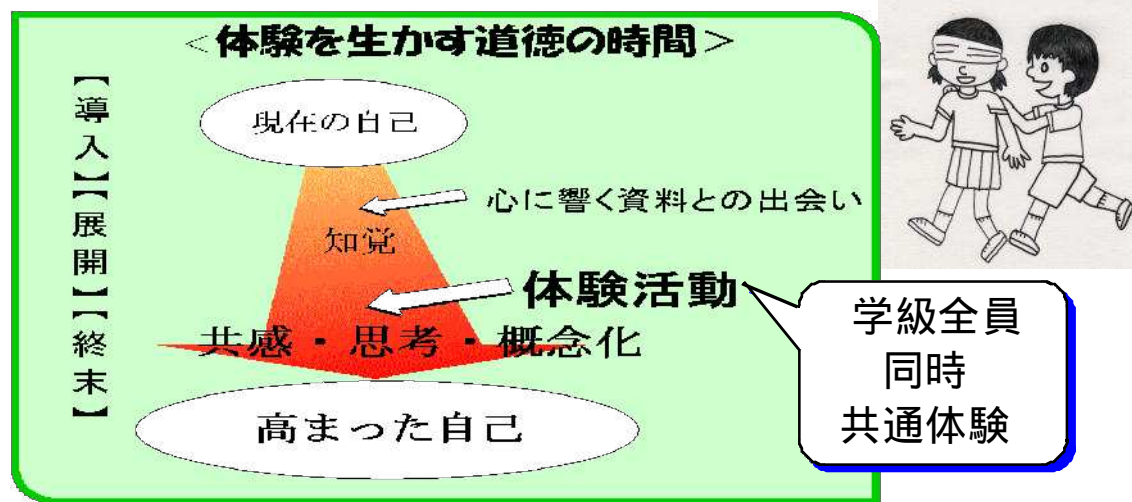
「体験」と言っても道徳のために特別な体験を特別に機会を設けて行わなくてもよい。日常生活の中にも豊かな体験はたくさんある。日常の体験を生かした道徳の授業を考えること、また、道徳の授業で学んだことを日常の体験に生かすことが非常に効果的である。

### 2. 特別活動や総合的な学習の時間等の体験を生かす

特別活動・総合的な学習の時間を生かした道徳の時間を作ったり、道徳の時間に学んだことをそれらの領域での体験に生かすように意識づけて、総合単元的にプログラムを組むのも良い。

### 3. 道徳の時間に体験活動を取り入れる

総合的な学習の時間や他教科における体験活動は、学級の仲間が同時に共通体験をできない場合がある。個々にバラバラの体験をするよりも、仲間と共通の体験をすることにより、気持ちの共有ができ、子供たちの心に残ることになる。これからは、道徳の時間内に体験を取り入れることがますます重要になってくる。



道徳の資料集も変わってきている！～道徳の時間内における体験を重視

資料集の中に、下のように道徳の時間に体験活動を取り入れるものや、体験活動が展開の中心になっているものも出てきている。

「絵手紙を書こう」  
自分の伝えたい気持ちを込めて絵を描き、文を書く。  
(2-2 人間愛・思いやりの心)  
光村図書中学道徳 2年

「何かお手伝いできることは」  
2人組でガイドヘルプをし合い、感じたことを話し合う。  
(2-2 思いやり・親切)  
光村図書どうとく 4年

「感じ合う」  
グループの仲間で、目の合図だけで、心を通じ合わせて、指定された人数だけが動くというゲームを行い、話し合う。(4-4 愛校心)  
光村図書どうとく 4年

この他に、自己内省的な題材、アサーショントレーニング的な題材等、様々な内容の資料が取り入れられるようになってきている。

## 5. 伝え合う力を育むプログラム

伝え合う力の育成が強く叫ばれている。伝え合う力の貧しさは、人間関係の形成にも大きく影響を与えている。このことから、「心を育てる」道徳の時間において、「心を伝え合える人間関係の育成」に資する指導が求められている。

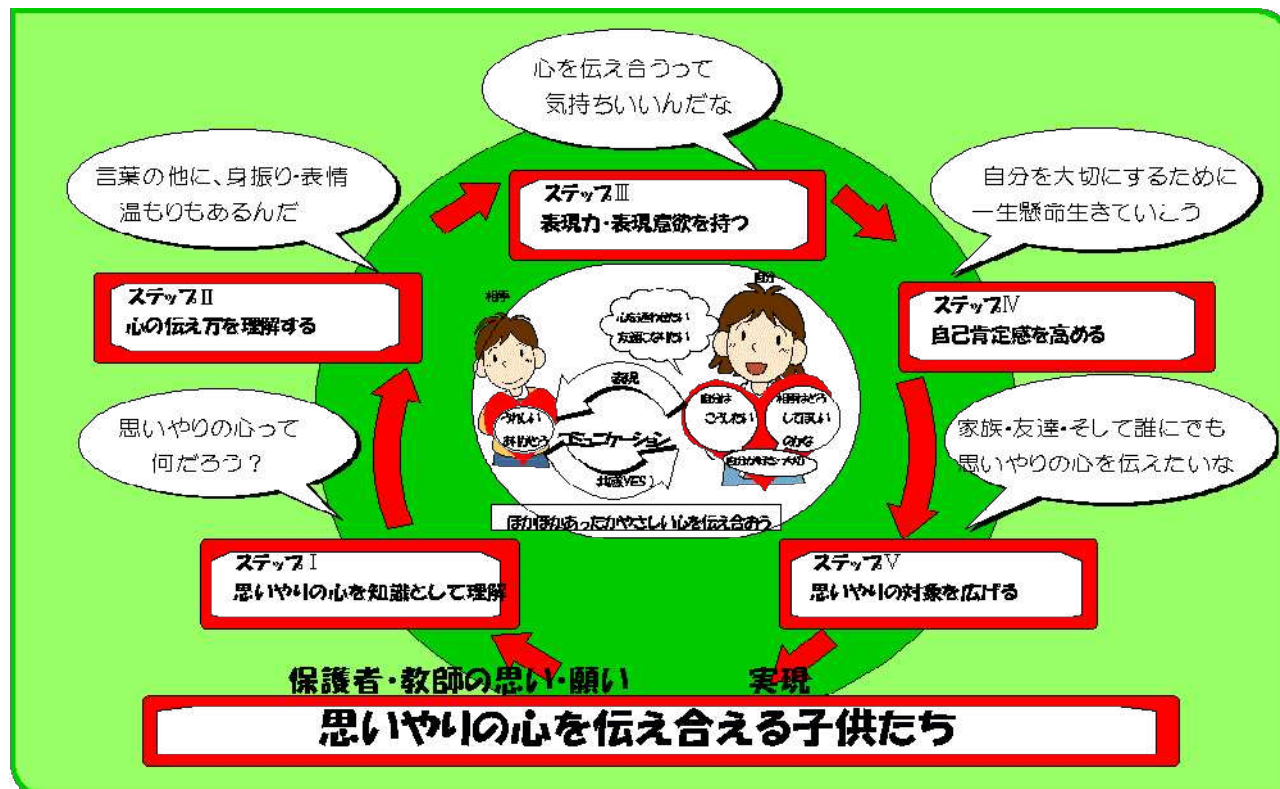
「児童生徒の問題行動対策重点プログラム」(最終まとめ)  
 ～平成16年10月文部科学省～  
 重点施策1の(2)「伝え合う力と望ましい人間関係の指導の推進」  
 具体策: 伝え合う力を高め、望ましい人間関係を構築するための  
 実践的なプログラムの開発・実施

文部科学省から出た左の報告を受け、「思いやりの心を伝え合える人間関係をはぐくむプログラム」を下のように構想した。

### 「思いやりの心を伝え合える人間関係をはぐくむプログラム」

- ステップ 思いやりの心を知識として理解する(理解をするきっかけ)
- ステップ 心の伝え方を理解する
- ステップ 表現力・表現意欲を持つ
- ステップ 自己肯定感を高める
- ステップ 思いやりの対象を広げる  
 (自分→家族→友達→その他の人々)

子供の意識の流れを大切にしたステップ  
 (詳しくは研究内容編参照)



教科の学習と同様に、大きなねらいを達成するために、子供の実態に応じたステップを考え、プログラムを組んで道徳の授業を行う。このように、子供の意識の流れを大切に、積み重ねて学習していくことが、これからの道徳教育には必要である。

## 6. 評価について

### 指導と評価の一体化を目指して

評価をその後の指導に生かす「指導と評価の一体化」を図るため、様々な方法で評価をし、保護者や子供の心の啓発や、次の授業の構想に生かしていくことが重要である。

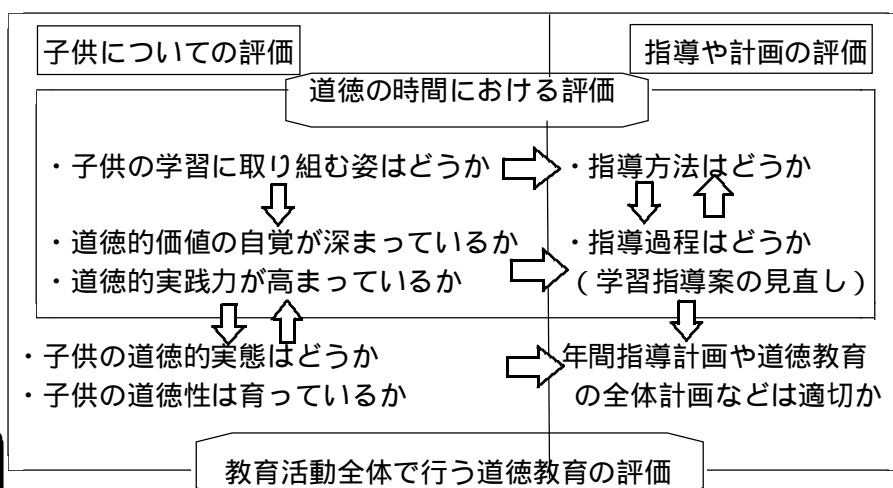
道徳の評価は、図1のように、道徳教育全体についての評価と道徳の時間の評価、及び、子供の道徳性に関する評価と教師の指導や計画についての評価がある。

図1 道徳の評価の考え方

#### ●具体的方法

観察法  
面接法  
質問紙法  
作文・日記  
ワークシート  
心のノート  
テスト法  
通信の利用  
(保護者の評価)

通信等を利用して保護者の評価を得ることの有効性は研究内容編参照



### 参考資料「役割取得能力測定テスト」について(テスト法の一つ)

アメリカのハーバード大学のセルマン教授は、「思いやりとは、相手の気持ちを推測し、理解することである」と提唱し、この能力を「役割取得能力」と呼んでいる。つまり「思いやり=役割取得能力」である。この能力を測定するテストを「役割取得能力テスト」という。セルマンの考案した役割取得能力を測定するテストを、法政大学の渡辺教授が、日本の道徳教育にあわせて改作した測定テストが下の資料である。

#### 役割取得能力テスト 小学生用(例)「テントウムシ先生」

テントウムシ先生は学校の先生です。テントウムシ先生のクラスはみんな、テントウムシ先生のことをいい先生だと思っています。でも、どうしていい先生だと思うかは、みんなばらばらです。

A: バッパは、勉強をしてくれるからいい先生だと思っています。

B: カブトムシは、みんなにごほうびをくれるからいい先生だと思っています。

C: チョウは、みんながうまくできるようになってほしいとねがっているからいい先生だと思っています。

D: クワガタは、何をやってもおこらないのでいい先生だと思っています。

テントウムシ先生がいい先生だと思う1番いい理由はどれでしょう。

発達段階の目安 A のレベル 2 B のレベル 1 C のレベル 2 から 3 への移行期 D のレベル 0

このような設問が数題ある。プログラムの有効性を客観的に把握するために、この役割取得能力テスト(アセスメントテスト)をプログラム実践の事前と事後に行い、能力の数値の変化を評価に使う。なお、役割取得能力の発達段階は上表のように、5段階に分かれる。

(出典 渡邊弥生著「V L F のよる思いやり育成プログラム」図書文化 2001 年)

| レベル  | 発達段階             | およその年齢    | 説明                                   |
|------|------------------|-----------|--------------------------------------|
| レベル0 | 自己中心的役割取得        | 3 ~ 5 歳   | 自分と他者の視点を区別することが難しい                  |
| レベル1 | 主観的役割取得          | 6 ~ 7 歳   | 自分の視点と他者の視点を区別して理解するが、同時に関連づけることが難しい |
| レベル2 | 二人称相応的役割取得       | 8 ~ 11 歳  | 他者の視点から自分の思考や行動について内省できる             |
| レベル3 | 三人称的役割取得         | 12 ~ 14 歳 | 自分と他者の視点以外、第三者の視点をとることができるようになる      |
| レベル4 | 一般化された他者としての役割取得 | 15 ~ 18 歳 | 多様な視点が存在する状況で自分自身の視点を理解する            |